

## 万葉集から

林 宏 国

今日よりは かへりみなくて 大君の  
醜の御盾と 出で立つ我は

う歌や恋歌が多いのに驚かされた。集中、  
勇ましい歌が余りにも少なく、家族を想  
未だに忘れ難い一首として、

夏の野の 繁みに咲ける 姫百合の 知  
りえぬ恋は 苦しきものそ

この歌は、小生が国民学校（現、小学  
校）の学童の頃に、軍国少年を育てるた  
めに万葉集の中から國語の先生が抄出し  
た防人の歌である。

戦後、敗戦国として我が国に米国式学  
校制度を取り入れて、六・三・三制が布  
かれることになった時、昭和二十五年、  
小生は島根県立松江高校に入学したが、  
未だ多くの学校では六・三・三制の教育  
内容を如何に充実したものとするかを試  
行錯誤していた時期ではないかと思われ  
る。

この様な不安定な教育環境にあって、  
国語の先生から万葉集を読むことを薦め

め、親友、況してや、ガールフレンドな  
ど出来る環境ではなく、いつしか卒業と  
いう心大式高校生勝つであったような気  
がする。

教室が変わる度に、心に秘めていた一  
首「夏の野の 繁みに咲ける 姫百合の  
知りえぬ恋は 苦しきものそ」が付き纏  
つていたのである。

どうも小生も人並みに思春期を過ごし  
ていたらしく、某女生徒が近くに座つて  
欲しいと願いつつ授業を受けていたので  
あるが、大方は的外れであつた。秘め歌  
の作者は女性であるが、この様な思いは  
男女区別なく湧くものであろう。

「三つ子の魂百まで」というが、老境  
に入つて高校時代の思いを逆手にとつて、  
密かに小生を思つてくれる架空の美女が  
いると想像しながら生きるのも、長生き  
を呼びこむ一法と愚考している。

言うまでもなく、不謹慎な考えで高校  
生活を送つたためか、卒業時の成績はび  
りから数えてX番めでした。

小生の高校入学時は、米国に倣つてホ  
ームルーム制が導入されたばかりで、学  
校行事や進学指導等の必要な時だけは級  
友はクラスに集まり、担任の話を聞くと  
いうような名目だけのクラス分けで、授  
業は選択性で教科ごとに教室が変わったた

## この青き惑星を掘り葱囲ふ

『青花』(一〇一〇年六月 高久清美 本阿弥書店)

### (二) 福富清子

「医家芸術」からの依頼「名句一句鑑賞」

は、無窮の宇宙の無数の星から一つ選ぶに等しい難事。締切りまでの時間が私には短すぎ、パスしようと思った。その時脳裏をよぎつたのが、私が医家芸術入会当時の事務局長鈴木喬氏の一言である。「人間いくつになつても誘われることが何でもお受けする方が面白いですよ。思わぬ世界が広がるものです」

かくして難題に挑戦することとなつた。選んだのが掲句である。実は、私が属する「秋」の結社誌『秋』一・二月号「高久清美『青花』の一句評」に、私は既に六百字書いている。『秋』の編集長でもある高久さんに事情をお話しし、再度「一句鑑賞」させて頂くことにした。

しかし医家芸術ご注文の長さに変える

のは意外に難しい。窮余の策として、まず『秋』掲載の原文をそのままお見せし、その後に、この句についての新たな発見、感概などを補足することにしたい。心からお許しを乞う次第である。

### (二)

この青き惑星を掘り葱囲ふ 清美

生活スタイル等の変化で冬場に野菜を囲う人は少数派と思われる今、『青花』で掲句に逢つて仰天した。この句集には、主婦の鑑とも言える高久さんの自画像が、自負・省慮・ユーモアで味つけして繰返し出て来る。しかし、『蓬瀬めき少し目深に夏帽子』(春シヨール闇に色浮きオペラ観る)こそ高久さんのイメージ。鍵を振るう格好など想像外だ。しかしここに高久さんの句作の仕掛け、即ち、古今東西の文化を自家樂籠中のものにした、桁違

き、慎ましい幸福を念ずる人々が、寒風の中、背戸や畑の片隅に泥まみれになつて数株の葱を囲う。この現美が高久さんの手にかかると、汗・涙・溜息等の浸みた一角の土地が、「青き惑星」に変貌するのだ。この措辞は半世紀前人類初の宇宙飛行士ガガーリンの発した「地球は青かつた」を下敷きにしているが、無限大の宇宙を飛びかう地球以外の星々をも幻出する働きは、こちらが大きい。青い惑星を掘つて囲われる葱は芳香を放ち、色鮮やかに瑞々しい風姿は凜としている。この一句は、換言すれば「埴生の宿」に生きる悦びに気づかせる氣宇壮大・色鮮やかな一コマの幻のようである。(次の世は魔女になりたし落葉掃き)と詠まれるが、人を楽しませるべく魔法の想像力を發揮する有難い魔女の位に既に達している。

### (三)

(一)で「青き惑星を掘る」高久さんを、私は「虚」と断定し、一句を想像の創造と決めてしまつてゐる。ところが後、お

聞きした話。市川市のお宅では毎年冬、お庭の隅に冬野菜をしつかり囲われること。鉄・シャベル農具一式揃つているそうだ。私の一方的な思い込みを止す高久さんの口振りには、いわゆる「自句自解」の押しつけは無く、「詩」とは「虚」を「実」のようではなく、「実」を「虚」のように創ること、という「秋」の創立者石原八束師の主張に添えたことに満足している気配があつた。

それについて、「庭の一遇を掘る」を「青き惑星を掘る」と言い、

ふらふこや一顆の星にふるるまで

(第一句集『一顆の星』)

離飾る地球ときどき揺れにけり

(『青花』)

水眼鏡冥府入口探しをり

(『リ』)

など、極く身近な句材でも宇宙的・地球的規模の句が出来上がる。その秘密は何だろう。

「秋」の佐怒賀主宰によれば、高久さんは「教養とエスプリの作家」である。一

九七〇年に学習院大学政経学部を卒業され、家庭に入つては主婦として、学究の「地球は青かつた」よりも更に三十二片腕として、

観音のおん手借りたし年詰まる

(『青花』)

雨蛙王婦に保護色ありにけり ( リ )

ホメロスの遺跡の猫と春惜しむ( リ )

ガリレイを裁きし回廊春の雪 ( リ )

銃持てるアラブ兵士と海市見る( リ )

国境てふ創ある大地鳥帰る ( リ )

等々、地球を大胆に巡りつつ、知性、感性全開の歳月を重ねられた結果であろう。

(『青花』)のあとがきに「おるそかに生き

てきたつもりはないけれど」と記される。

雪国の金沢で半世紀以上暮らし、旅と言

えば東京・金沢の往復ぐらいの私が自分

の非才を棚に上げて高久さんを羨むのは

みつともない事だが、また、W・ブレイ

クの「一粒の砂に宇宙を観る」、莊子の「井

の中の蛙大海を知らず」に続く「されど、

大空の深さを知る」で無理に自分を宥め、

自己満足していくは新発見は望めない。

話が横道にそれるが、高久さんの「この青き惑星」の土台となつたガガーリンの「地球は青かつた」よりも更に三十二年前、詩人北原白秋は詠んでいる。

月から見た地球は、円かな

紫の光であった、

深いにほひの、

わたしは夢見てゐたのか、

紫のその光を、

わが東に

……

……

(詩集『海豹と雲』 1929年)

これを初めて読んだ時の感激。詩人の想像力に溜息をついた。ところが、白秋

の年譜に目を通して少し合点したこ

とがある。一九二八年七月、彼は大阪朝

日新聞の依頼で、恩地孝四郎と旅客機ド

ルニエ・メルクールで福岡から大阪まで

飛んでいるのだ!

詩という「虚」の世界に花が咲くのは、土壤深くに「実」の根があればこそであ

る。高久さんと同じはずの「青き惑星」に住む私、少し真似して、猫の額ほどの庭の隅をほじくり、朝顔の種など蒔いてみようか——。

この時、古人の名句が脳裏をよぎった。  
朝がほや一輪深き淵の色　　藤村

時あたかも花の季節、最後にあの芭蕉の一句を、日本全国の、東北の、三春町の人々に捧げたいと思う。

さまざまのこと思ひ出す桜かな　芭蕉  
大戦最中　青春の句  
有　泉　七　種

その季節になれば、きまつたように、  
脳裡に浮かんでくる俳句の一つに、

惜春のランプかかげし一夜かな

というのがある。作者は糸木秀穂先生。いまは、「医芸俳壇」の常連のひとりであるが、彼の青春時代の作品のひとつであり、私は、いまでも、彼の代表作のひとつとして、こころのなかにとどめている。

昭和十七年ごろ。秀穂君も私も、東京は愛宕のキヤンバスで、医学を学んでいた。戦時中ではあったが、緒戦の勝ち戦のころであつたから、医学のかたわら、俳句にも興味を抱いて、当時の俳句結社に所属して、作句にはげんでいた。秀穂君は加藤楸邨の「寒雷」であつたかと思う。私は飯田蛇笏の「雲母」であつた。そのほか、「若葉」の福島君、鷺谷君、土屋君、「寒雷」の谷沢君なども俳句を楽しんでいた。なかでも糸木君と福島君とは、リーダー的存在で、「春蟬会」と名づけた句会を立ち上げて、ともども、月ごとに句会を楽しんでいた。

さきごろ、糸木秀穂君から、ハガキが届いた。それには、「(前略) 東京に初雪が舞う日に退院して来ました。帰宅し、貴兄からの賀状嬉しく拝見した次第です。当方からは入院中のため欠礼し失礼しました。貴兄はお元気の御様子何よりです。医家芸術で毎回貴兄の句を拝見するのを楽しみにしています。(後略)」。とするされていた。秀穂君も私も、卒寿を目の前にした高齢である。しかし、俳句には年齢がない。これからも、ともどもに、俳句を楽しんでゆきたい。そんな想いの昨日である。